



省略

並行セッション2A ‘Islamic Homelands’ inside Regional Powers

宇野 陽子

津田塾大学国際関係研究所
研究員

本セッションでは、山根聡氏の司会のもと、ユーラシアにおいてムスリムが少数派として居住するインド、中国、ロシアに関する報告が行われた。ダール・アル・ハルブの状況下で暮らすムスリムの地域的な比較を通じて同概念を問い直す内容であった。

Moinuddin Aqeel氏は、英領インドの理解をめぐる一八〇二世紀のウラマの議論を取り上げた。教育や司法がシャリーアに基づいて実施されない英占領下のインドはダール・アル・ハルブであるという認識から、ジハードや移住が提起されたという。しかしこの論の中心的提唱者シャール・アブドウルアズィーズの死や闘争の挫折を経て、複数のウラマがインドはダール・アル・イスラームであると表明しジハードは非合法とされた。またこの議論には、英占領以前のヒンドゥーやマラータによる支配をどう理解するかという問題も含まれて

いた。Aqeel氏によれば、インドをダール・アル・ハルブ／イスラームと見なす議論はパキスタンへの支持／不支持という形で今なお影響力を持っているという。

続いて、Ma Qiang氏は、中国の回族が持つ中国文明とイスラームという二重のアイデンティティを、中国社会におけるムスリムの平和的生存を可能にした要因として取り上げている。Ma氏はまず、回族の多数は中国西部に居住しているものの、他の地域にも散在して見られることを示し、さらに回族のイスラーム文化に中国文化が浸透している状況をマスジド建築やカリグラフィーなど多くの写真を用いて紹介した。報告タイトルに挙げられていた回族のスローガン「愛国愛教」はアッラーと中国政府双方への忠誠心を意味するという。Ma氏は、回族は中国文化との調和を図りながら多数派と共存してきたことから、ダール・アル・ハルブ／イスラームという議論は回族にはあてはまらないとした。

長縄宣博氏は、二〇世紀初頭の帝政ロシアにおけるムスリム知識人のローカル／トランスナショナルな活動について、一次史料の詳細な調査に基づいて報告した。ムスリムの布教活動を警戒するロシア正教の知識人は、警察と協力してムスリム知識人を「パン・イスラーム主義者」と見なして地域から追放した。このようにして多宗教的な集団であった地域共同体が宗教的に分断されると、帝政ロシアと交戦中であったオスマン帝国へのムスリム社会内での寄付活動も問題視された。こうした状況下でムス

リム知識人らは、ロシアのムスリム臣民はロシアとオスマン帝国の仲裁者になれると主張したという。ロシア当局や国際関係に翻弄される中で、自らの存在はロシアに寄与するものと主張することで主体性を追求するムスリム臣民の言論は印象的であった。

三報告はいずれも、ダール・アルハルブの状況下での多数派との緊張関係を指摘しつつ、その中でイスラーム文化を保持しようとするムスリムの諸活動に注目している点で共通していた。ダール・アルハルブ／イスラームという概念を飛び越えようとする意欲的な三報告に対し、フロアからの質問も非常に盛況かつ熱心であった。

省略



並行セッション3A

Islamist Discourse in Media:
Papers, Computers, and Satellites

千葉 悠志

アジア・アフリカ
京都大学大学院
地域研究研究院
博士課程

「メディアにおけるイスラミストたちの言説―出版・コンピューター・衛星」と題された本セッションは、二つの発表および、各討論者らによる中東各国のメディア状況に関する報告がおこなわれた。まず企画者である保坂修司氏が、イスラーム世界（とりわけアラブ世界）におけるマスメディアの発達について、とくに権力との関係に着目して概観された。一般に、マスメディアの歴史を論じる際には、その起源を一五世紀のグーテンベルクの印刷革命に求めることが多い。しかし、多くのアラブ諸国では、当時の社会経済状況、権力関係などにより、印刷技術が実際に導入されるようになるのは、それから約三世紀を経たことであった。さらに、ひとたびそうした技術が社会にもたらされてのちも、多くの国々では、時々の権力者らが、メディアを体制のイデオロギー装置と看做し、それを国家の占有物とする傾向が強かった。イス

ラーム世界のメディアを考察する際には、メディアをとりまく社会状況や、権力関係といったものをより詳しくみていく必要があるだろう。

Zahid Munir Amir氏は、パキスタンの国民的詩人であるイクバルをとりあげて、イクバルの作品が、どのような新聞や雑誌などに発表されてきたのかを、具体的な冊子名などを挙げながら論じられた。また、イクバルの思想の一端を明らかにする目的から、彼がパキスタンの独立に対して、いかなる見解を示していたのかを考察された。ここでは、イクバルが、早い時期からパキスタンがインドから分離独立することを必要不可欠であると看做していたこと、さらには、そうした両者の分離が、単にインド・パキスタン間で生じる感情的な摩擦問題の回避のみならず、両者間の平和構築にあたって重要となる点を強調された。

Gary R. Bunt氏は、インターネットにおけるイスラーム的な言説空間（氏はこれをCyber Islamic Environment/CIEと呼ぶ）、わけでも急進派による「電子ジハード(e-jihad)」の活動をとりあげて、その実態について論じられた。報告では、はじめにインターネット空間における、イスラーム的傾向が強いホームページを、いくつかの事例とともに示された。例えば、ソーシャルネットワークサイトの大手Facebookは、若者を中心とした言論空間を形成する傾向が強いが、それは、しばしば政治的・急進的なメッセージ性を帯びた別のウェブサイ

トへとつながっていることが多い。次に、そうした急進的なウェブサイトが作成されているのは、情報統制が強いアラブ世界ではなくて、むしろイギリスのような言論が保障された空間であるということが指摘された。さらに氏は、インターネット上で展開されている、イスラミストたちの活動を、彼らが用いる様々なシンボルの提示を通じて紹介された。

以上二つの報告に続き、討論者である山根聡氏、阿部るり氏、また司会者である田中浩一郎氏により、パキスタン、トルコ、イランという三つの国のメディア状況がそれぞれ紹介された。各国のメディア状況の比較を通じて得られる視点は有益であるのみならず、イスラーム世界におけるメディアの特徴を明らかにしていくための必要不可欠な作業といえよう。ますます情報化が進む今日のイスラーム世界を考えるうえで、社会変容と密接に関わるメディアの役割を考察する意味は大きい。本セッションは、今日のイスラーム世界のメディア事情をしるための、非常に有意義な機会になったに違いない。